

# 明治期の漢語理解

はじめに

明治期の漢語については、さまざまな観点からの考察が行なわれている。本稿では、片岡義助によつて編輯され、明治十(一八七七)年に刊行された『御布令／新聞漢／語必用』文明いろは字引』(以下では角書きを省略して『文明いろは字引』と、あるいは単に本書と、呼ぶことにする)を素材として、明治期における漢語がどのように理解されていたかについての考察を試みることにする。必要に応じて、他の幾つかの漢語辞書を参照する。なお、『文明いろは字引』は同じ片岡義助によつて「改正増補」されて明治十五年に出版されている。二つの『文明いろは字引』の関わりについては、拙書『漢語辞書論攷』(二〇一一年港の人刊)においてやや詳しく述べた。

## 一　さまざまな漢語理解の方法

『文明いろは字引』は「露頭 アラハル」(七ウ四行目)という

形式で記述されている。以下本稿では、振仮名「ろけん」で示されている「ロケン」という語を狭義の見出し項目、「アラハル」をその語釈とみる。「露頭」は見出し項目「ロケン」にあてられた漢字列ととらえておく。狭義の見出し項目に漢字列を与えた「露頭」を広義の見出し項目とみる。見出し項目に関して、「狭義の／広義の」と断らない場合もある。

「ろ之部」「は之部」から幾つか例を掲げ、それによつて考えを進めることにする。

## 今　野　真　二

見出し項目	語釈	所在
1 路程	ロテイ	7ウ6行目 和語一語
2 路徑	ロケイ	7ウ6行目 和語一語
3 判断	ハンダン	10ウ6行目 和語一語
4 煩多	ハンタ	9ウ3行目 和語一語
5 盤查	ハンサ	9ウ4行目 漢語一語
6 俳優	ハイイウ	10ウ5行目 漢語一語
	ヤクシヤ	

7	論談	ロンダン	サウダン	8才4行目	漢語一語
8	放念	ハウネン	アンシン	11ウ9行目	漢語一語
9	薄給	ハクキウ	ワヅカノキウキン	9ウ9行目	和語+漢語
10	芳恩	ハウオン	アツキランギ	13才7行目	和語+漢語
11	半減	ハンゲン	ハンブンヘラス	10ウ8行目	漢語+和語
12	叛蹟	ハンセキ	ムホンノアト	11才2行目	漢語+和語
13	藩政	ハンセイ	ハンノセイヂ	10才1行目	漢語+漢語
14	亡論	ハウロン	ムホウノロン	10ウ3行目	漢語+漢語
15	陋習	ロウシウ	イヤシキナラヒ	7ウ9行目	和語の組み合せ
16	邦域	ハウイキ	クニノサカヒ	10才5行目	和語の組み合せ
17	博愛	ハクアイ	ヒロクヒトラアイスル	10ウ10行目	説明的語釈
18	放埒	ハウラツ	トリシマリノナキコ、ロ	11ウ10行目	説明的語釈
19	佩荷	ハイカ	アリカタサヲオモヒワスレヌ	9才4行目	説明的語釈
20	拝領	ハイレウ	カミヨリタマハリモノ	11ウ2行目	説明的語釈

見出し項目となつてゐる漢語の語義を、当該辞書編集者がどのように理解したかが「語釈」として示されていることになる。したがつて、編集者が異なれば漢語語義理解が異なり、その結果として「語釈」が異なるということは当然あり得る。そのことを前提として、「語釈」の異同を、手がかり、さらには根拠として、漢語辞書の系譜的聯関が検討されてきた。それは十分な成果をあげており、現在では「明治初期に刊行されたほとんどの漢語辞書は、少なくともその体裁、掲出語の枠、語釈のいずれかの一つを『新令字解』か『漢語字類』、または両者に基づいて成立している」(松井利彦『近代漢語辞書の成立と展開』、一九九〇年笠間書院刊、一七九

頁)ということが(細かな検討の余地はあると考えるが)認められてゐる。しかし、ある漢語の「語釈」を考えた場合、同じ時期の言語使用者であれば、誰もが同じ「語釈」になるということもあり得ないことではない。漢語辞書の語釈は横一センチメートル、縦二センチメートル程度の狭い「格」に書かれていたことが多く、文字量は相当に制限されている。そうした制限の下では、工夫の余地もさほどないのであつて、同じような「語釈」をうみだしやすいということも考えに入れておく必要がある<sup>1)</sup>。

1~4は、見出し項目となつてゐる漢語を和語一語で説明してゐる。3「ハンダン(判断)」には和語動詞「サバク」が語釈として与えられてゐる。「ハンダン(判断)」は、現代日本語においては、名詞としても、「スル」と複合したサ変動詞としても使用される。名詞「サバキ」ではなく動詞「サバク」を語釈に置いたことが有意であるとすれば、当該時期は、まずは動詞としての使用が優勢であつたことになる。こうした文法性にも注意する必要がある<sup>2)</sup>。

5~8は、見出し項目を漢語一語で説明してゐる。稿者は辞書体資料を「見出し項目—語釈」という枠組みでとらえてゐるが、それは「説明される語—説明する語」という関係にある。「見出し項目」「説明される語」をできるかぎりわかりやすく説明したものが「語釈」「説明する語」ということでもある。う。「見出し項目」と「語釈」との関係は、具体的にみればそれぞれ異なるが、一括して「語釈」をながめた場合、「語釈」は「説明する語」として、「わかりやすい」ということと関わつて、共通する「ある調子」

をもっているともいえるよう。

山田俊雄は『日本語と辞書』（一九七七年中公新書）において、『四書・小学・近思録』などの要語解（二二七頁）とみなすことができる、元禄十一（一六九八）年刊『經書字辨』（乾坤二冊）を採りあげ、それが「説明する語」として「いわゆる擬声語・擬態語すなわち音象徴の語を自由自在に用いて、まことに平明である」（二三八頁）と指摘し、それに続けて、「このような用語と同列にならぶものとして用いられている漢字音の語は次のようなものがある」（同前）と述べる。稿者は先に「共通する「ある調子」をもっている」と述べたが、それは右の「同列にならぶもの」と重なり合う。1～20には含めなかったが、『文明いろは字引』にも、「赫怒（かくど） ムツトハラタテル」（三十四オ三行目）、「蕩々（たうたう） パツト シタルコト」（四十一ウ七行目）、「歩揺（ほゆ） ビラタタカンザシ」（一六オ六行目）、「遲緩（ちくわん） グズタタ」（二十六ウ二行目）のように、「語釈」に音象徴語が使われることがある。

9・12は見出し項目となっている漢語を語構成要素に分け、その一方を和語、もう一方を漢語で説明する。語釈側の漢語に注目すれば、見出し項目となっている漢語の語構成要素のうち、漢語で説明されている要素は、そのような漢語で理解されているということになる。例えば、「ハンゲン（半減）」の語構成要素「ハン（半）」は「ハンブン（半分）」と理解され、「ハンセキ（叛蹟）」の語構成要素「ハン（叛）」は「ムホン（謀叛）」と理解されていることが窺われる。「ハンセキ（叛蹟）」に統一して「叛」字を頭字とする見出し項目が続くが、そこには「叛賊（はんぞく） ムホンニン」「叛臣（はんしん）

ムホンニン」「叛術（はんぎゅつ） ホシイマ、ナリ」とあって、すべてではないにしても、語構成要素「ハン（叛）」が漢語「ムホン（謀叛）」と重ね合わせて理解されているさまが窺われる。『文明いろは字引』に先立つ明治八年に刊行されている『廣益熟字典 仮名引之部』には「叛蹟（はんせき） ムホンノアト」「叛謀（はんぼう） ムホンニ」「叛逆（はんぎやく） ムホン」（十五オ）とあり、同じような状況が窺われる。『文明いろは字引』と『廣益熟字典 仮名引之部』との直接的な関係はこれまでに指摘されておらず、そうであるとするば、異なる言語使用者の理解が共通していることになる。

13・14は見出し項目を語構成要素に分け、それらを漢語で説明している。こうした理解のしかたはごく自然なものと思われ、現代においても一般的なものといえよう。例えば、『岩波国語辞典』第七版新版（二〇一二年刊）では、「ハンセキ（犯跡）」を「犯罪の証拠となる形跡」、「バンセツ（晩節）」を「晩年の節操」、「ハンレイ（判例）」を「過去の判決の実例」（傍点稿者）と説く。漢語の語義理解には、他の漢語語彙の語義理解が深く関わっていることがわかる。

15・16は、見出し項目となっている漢語を語構成要素に分け、その要素を和訓によって理解している。ひととりの説明にはなっていると思われるが、「ライレキ（来歴）」を「キタアリサマ」（四十九ウ八行目）と説くようなこともあって、見出し項目の説明として不十分な語釈になる場合もある。

17・20は、見出し項目を語構成要素に分けるのではなく、見出し項目全体を説明している。いうまでもなく、中国語と日本語と

は言語が異なり、語彙体系の形成のしかたも異なるため、このようないふこともおこり得る。

ここまで述べてきたことを整理すれば、見出し項目となつてゐる漢語を「語を単位として説明する」場合と、「語構成要素を単位として説明する」場合とがあり、さらに「語全体を説明する」場合とがあることがわかつた。前二者においては、漢語による場合と和語による場合とがある。本稿では、これらの漢語理解の方法の中で、5・8のような、「漢語を漢語一語で説明する」場合に注目したい。

## 二 語釈が漢語一語である場合

『文明いろは字引』から、見出し項目に漢語一語の語釈が与えられてゐるものをひろいだし、次に掲げる。本稿はどのように漢語が理解されてゐるかを探ることを目的としているので、『文明いろは字引』全体から、行論に必要と思われる例を示す。したがつて、ここに示した例以外に語釈が漢語一語である場合がないわけではない。番号の下に、見出し項目となつてゐる漢字列を置き、『見出し項目』として、平仮名で施されてゐる振仮名を発音した語形を片仮名の現代仮名遣いによつて示した。「語釈」は『文明いろは字引』のまま示し、その漢語を現在表わすと稿者が考へる漢字列を丸括弧に入れて添へ、その下に『文明いろは字引』における見出し項目の「所在」を添へた。一つの手がかりとして、見出し項目となつてゐる漢語、語釈として置かれた漢語について明治二十四年に刊行を終へた『言海』にあたり、『言海』に見出し

項目として採られていた場合には○、そうでなかつた場合には×を附した。

	見出し項目	語釈	所在
1	偉奇 ×イキ	○フシギ (不思議)	1オ10行目
2	異邦 ×イホウ	○グワイコク (外国)	1ウ10行目
3	委員 ○イイン	○ソウダイ (総代)	2オ10行目
4	威勢 ○イセイ	○ケンシキ (見識)	2ウ2行目
5	威權 ○イケン	○イセイ (威勢)	2ウ2行目
6	陰図 ×イント	○ムホン (謀叛)	2ウ4行目
7	唯諾 ×イダク	○シヨウチ (承知)	2ウ7行目
8	邑土 ×ユウド	○リヨウブン (領分)	3オ8行目
9	有年 ×ユウネン	○ホウネン (豊年)	5オ8行目
10	殷実 ×インジツ	○ハンジヤウ (繁盛)	5オ8行目
11	医療 ×イリョウ	○リヤウジ (療治)	5ウ7行目
12	方技 ×ホウギ	○ゲイノウ (芸能)	9ウ1行目
13	方位 ○ホウイ	○ハウガク (方角)	9ウ1行目
14	拝伏 ×ハイフク	○ハイフク (平伏)	11ウ1行目
15	方物 ○ホウブツ	○コクサン (国産)	12オ2行目
16	版籍 ○ハンセキ	○リヤウブン (領分)	13ウ4行目
17	貿易 ○ボウエキ	○カウエキ (交易)	13ウ5行目
18	忍心 ×ニンシン	○シンボウ (辛抱)	15オ4行目
19	封土 ×ホウト	○リヨウブン (領分)	15ウ8行目
20	封疆 ×ホウコ	○ヘイモン (閉門)	15ウ8行目
21	没齒 ×ボッシ	○シヨウガイ (生涯)	16オ4行目
22	封邑 ×ホウユウ	○リヨウブン (領分)	16ウ5行目
23	本分 ×ホンブン	○シヨクブン (職分)	16ウ10行目

24	豊沢	×ホウタク	○ホウネン(豊年)	17	17
25	豊歳	×ホウサイ	○ホウネン(豊年)	17	17
26	変事	×ヘンジ	○ソウドウ(騒動)	18	18
27	返報	○ヘンボウ	○ヘンヂ(返事)	20	20
28	土木	○ドボク	○フシン(普請)	21	21
29	答辞	×トウジ	○ヘンジ(返事)	21	21
30	得失	○トクシツ	×ソントク(損得)	22	22
31	得喪	×トクソウ	×ソントク(損得)	22	22
32	都城	○トジョウ	○ジョウカ(城下)	22	22
33	答札	○トウレイ	○ヘンレイ(返札)	22	22
34	督迫	×トクハク	○サイソク(催促)	23	23
35	鬭争	×トウソウ	○ケンクワ(喧嘩)	23	23
36	敦朴	×トンボク	○ジツテイ(実体)	23	23
37	刀圭	○トウケイ	○イシヤ(医者)	24	24
38	駐劄	×チユウサツ	○トウリウ(逗留)	27	27
39	旅費	○リヨヒ	○ロギン(路銀)	29	29
40	流融	×リュウユウ	○ユウヅウ(融通)	29	29
41	応接	○オウセツ	○ヲ、タイ(応対)	31	31
42	講和	×コウワ	○ワボク(和睦)	33	33
43	高手	×コウシユ	○ジョウウツ(上手)	35	35
44	衙庁	×ガチヨウ	○ヤクシヨ(役所)	38	38
45	勘検	×カンケン	○ギンミ(吟味)	38	38
46	海外	○カイガイ	○グワイコク(外国)	39	39
47	與党	×ヨトウ	○ドラルイ(同類)	39	39
48	容色	○ヨウシヨク	○キリヨウ(器量)	40	40
49	祖宗	○ソソウ	○センゾ(先祖)	44	44
50	聡悟	×ソウゴ	○ハツメイ(發明)	44	44

## 二——『言海』との対照からわかること

右では、見出し項目となっている漢語、語釈として置かれた漢語が、『言海』に見出し項目として採られているかどうかを○×で示した。『言海』は、『本書編纂ノ大意』の冒頭において「此書ハ、日本普通語ノ辞書ナリ」と謳う。「普通語」の内実については、さまざまな観点から検討を加える必要がある。本稿では、漢語辞書の見出し項目となっている漢語と見出し項目を説明するために語釈に置かれた漢語を手がかりにしているが、「語釈に置かれた漢語」に著しい傾向が現われている。右の五十例は、先に述べたように、『文明いろは字引』にみられるすべての例ではないので、あくまでも抜き出した範囲内という留保がついているが、それでも傾向ははっきりしていると考ええる。語釈に置かれた漢語では、例30と例31とに共通して置かれた漢語「ソントク(損得)」以外の漢語はすべて『言海』の見出し項目となっている<sup>3)</sup>。

『文明いろは字引』が刊行されたのが明治十年で、『言海』が刊行を終えたのが明治二十四年であるので、両者刊行には十四年の隔たりがある。『文明いろは字引』と『言海』とを共時的にとらえてよいとすれば、『言海』が見出し項目に採りあげた漢語と『文明いろは字引』が見出し語となっている漢語を説明するために使った漢語」とに重なり合いがあるという点に注目してよいことになる。しかし、十四年が経過するうちに、漢語語彙体系に著しい変化が生じていたとすれば、右のように単純な説明はしにくくなる。どのようにみるのが妥当であるかについては、今後さらに考えていくことにしたいが、今ここでは「重なり合いがある」

ことに注目しておきたい。

「見出し項目」においては○と×とが混在していて、傾向をつかみにくい。もし『言海』が見出し項目とする漢語にばらつきがないとすれば、『文明いろは字引』が見出し項目としている漢語の側にばらつきがあることになる。そして『言海』が「普通語」の辞書であることを貫いているのだとすれば、『文明いろは字引』の見出し項目となっている漢語で『言海』に見出し項目として採られていない漢語、すなわち×がついている漢語は「普通語」ではないことになる。

例えば、例12「ホウギ（方枝／方伎）」、例22「ホウユウ（封邑）」は『史記』にみえ、例15「ホウブツ（方物）」、例19「ホウト（封土）」は『漢書』にみえ、例10「インジツ（殷実）」は『後漢書』にみえ、例21「ボッシ（没齒）」は『論語』にみえ、例18「ニンシン（忍心）」は『詩経』にみえている。ちなみに、例20「ホウコ（封綱）」は『大漢和辞典』の「封」字の條下にみられない。『漢語大詞典』第二版第二卷下冊は「封綱」を「嚴密関鎖」（二二六〇頁右）と説き、南宋の洪邁（一一三〇―一二〇二）の編纂した志怪小説『夷堅志』と『紅樓夢』第二十三回を用例として掲げている。『詩詞曲小説語辞大典』（一九九三年群言出版社刊）もまったく同じ記事を掲げている。このことからすれば、「封綱」は近代中国語である可能性があるであろう。右のことからすれば、当然のことともいえようが、『佩文韻府』にも「封綱」は載せられていない。

右の検討は、漢語辞書が見出し項目として採用している漢語の「語性」をはかる手がかりの一つということになるが、「国史左

漢」や四書五経などの中国古典文において使われた漢語＝古典中国語が何らかの経路によって漢語辞書の見出し項目に「流れ込んでいる」ということ、またそうした古典中国語ではない近代中国語が漢語辞書の見出し項目に「流れ込んでいる」ことを想定しておく必要があると考える。松井利彦の「近代漢語辞書一覽」（京都府立大学学術報告「人文・社会」第四十九号、一九九七年、『近代漢語辞書の基準』附録）によれば、『文明いろは字引』は一一七四〇語を収めている。明治二年に刊行され、後の漢語辞書に大きな影響を与えた『漢語字類』が収めている漢語は四三四〇語にすぎない。一万語を超える漢語を収めた漢語辞書の見出し項目がどのようにして整えられたかについては、今後ともさまざまな観点から検討を加えていきたい。

## 二―二 語釈に共通してみられる漢語をてがかりにして

### わかること

例えば、例8「ユウド（邑土）」も例16「ハンセキ（版籍）」も例19「ホウト（封土）」も例22「ホウユウ（封邑）」も、すべて漢語「リョウブン（領分）」で説明されている。ここから、ひとまずは「ユウド」「ハンセキ」「ホウト」「ホウユウ」「リョウブン」が強く結びついていることが窺われるが、結局「ユウド」「ハンセキ」「ホウト」「ホウユウ」の漢語語義の異なりは捨象されて理解されていることになる。右に示した以外に、「菜地」「レウブン」（七十六ウ十行目）「菜邑」「レウブン」（七十八オ九行目）もある。

明治十二年に刊行された『必携熟字集』は松井利彦（一九九七）



される語が絞られていくのは当然のなりゆきといつてよい」(二七一頁)と述べた。すべて今後の課題といわざるをえないが、漢語が淘汰されていく過程の考察は、当該漢語語義が他の日本語(和語・漢語)との関わりの中で、どのように理解されていたのかについての目配りなしに行なえないと考える。ある漢語がどのように使われていたかということと同時に、周辺に存在していたであろう、他の語との関わりを考えることはむしろ当然であろうが、それを「理解」という線まで掘り下げて行なう必要がある。

### 三 漢語語構成要素・一字漢語

『文明いろは字引』には「弊邑」ワガリヨウブン(十八ウ八行目)、「別邑」ホカノリヨウブン(十九オ十行目)という見出し項目がある。さらに「削封」レウブンヲヘラス(七十九オ八行目)「食邑」レウブン(二〇ハウ三行目)もある。

「弊居」ワガイヘ「弊宅」ワガイヘ「弊邸」ワガイヘ「弊店」ワガミセ「弊社」ワガクワイシヤ「弊害」アシキクセ「弊風」アシキフウゾク「弊習」アシキナラワセ「弊政」アシキマツリゴト「弊国」アシキクニ」という見出し項目を考え併せると、「弊」字字義を「ワガ」と「アシキ」とに緩やかに分けて理解していると覺しい。「弊」字字義を(「わるい」と大きく捉え、その(「わるい」に(「自分のことの謙称」を含めることは現代でも行なわれている理解といえよう。これは「弊」字字義を二つの和語によって理解していることを窺わせる例であるが、「ヘイユウ(弊邑)ワガリヨウブン」「ベツユウ(別邑)ホカノリヨウブン」では、語構

成要素である「ユウ(邑)」が「リヨウブン(領分)」と理解されていると覺しい。

先には、「ユウド(邑土)」「ハンセキ(版籍)」「ホウト(封土)」「ホウユウ(封邑)」「ホウキョウ(封境)」「ホウナイ/ホウタイ(封内)」の六つの漢語が「リヨウブン(領分)」と結びつけられて理解されていることを指摘したが、それに加えて漢語語構成要素「ユウ(邑)」も「リヨウブン(領分)」と結びつけられて理解されていることが窺われる。

「ゼイ(税)」と「ウンジヨウ(運上)」とが、「ヨウ(洋)」と「セイヨウ(西洋)」とが結びついていることなどは、いうまでもないことであろう。それが窺われる具体的な見出し項目をそれぞれ示しておく。「車税」クルマノウンジヤウ(二〇四オ五行目)「商税」アキナヒノウンジヤウ(二〇五ウ七行目)「稅務」ウンジヤウヲトリタテヤク(二一六オ三行目)「征稅」ウンジヤウヲトル(二一七オ四行目)「税金」ウンジヤウノカネ「稅額」ウンジヤウノタカ(二二〇オ二行目)は前者の例、「ヨウシユウ(洋習) セイヨウフウ(五十四ウ二行目)」「ヨウフク(洋服) セイヤウノキモノ(五十四ウ三行目)」「ヨウシヨ(洋書) セイヤウノシヨ(五十四ウ三行目)は後者の例にあたる。

「簡便」ベンリヨクスル「簡法」ベンリナヲキテ(三十六ウ)「簡畧」ベンリヨクスル(三十九オ)からは、「カン(簡)」と漢語「ベンリ(便利)」とが結びつき、その結びつきに基づいて漢語が理解されていることが窺われる。

「爭論」アラソヒギロンスル(四十七オ二行目)、「論發」ギロン



ヲシカケル」(八〇四行目)「国論」クニヂウノギロン」(六十七オ七行目)「覈論」タシカナギロン」(六十八オ九行目)「細論」コマカキギロン」(七十九ウ一行目)「私論」ワタクシノギロン」(九十四ウ七行目)「詳論」ツマビラカニギロンスル」(一〇五オ四行目)からは、「ロン(論)」と「ギロン(議論)」とが結びついているさまが窺われる。その一方で、「議決」ギロンヲトリキメル」(八十二ウ九行目)「議長」ギロンノカシラ」(八十五オ二行目)「衆議」オホゼイノギロン」(一〇〇オ一行目)「衆議」ヲウゼイノギロン」(一〇五ウ八行目)もあり、「ギ(議)」も「ギロン(議論)」と結びついている。「共議(きやうぎ)」コトヲソウダンスル」(八十六ウ七行目)「熟議」ヨク々々ソウダンスル」(一〇一オ十行目)では、「ギ(議)」が「ソウダン(相談)」とも結びついていることがわかる。その「ギロン(議論)」は「議論」コトノヒヨウギスル」(八十二ウ九行目)という見出し項目としてみえ、「ヒヨウギ(評議)」が「ギロン(議論)」を説明する語として使われている。「ヒヨウギ(評議)」も見出し項目となっており、そこには「評議」ソウダン」(一二二ウ十行目)とある。ここでは、「ヒヨウギ(評議)」が「ソウダン(相談)」によって説明されている。一字漢語「ギ(議)」も「ロン(論)」も漢語「ギロン(議論)」で理解されており、その「ギロン(議論)」は「ヒヨウギ(評議)」で説明され、その「ヒヨウギ(評議)」は「ソウダン(相談)」で説明される。上位にある語は下位にある語で説明できるので、「ギ・ロン」を「ヒヨウギ(評議)」で説明することもできるし、「ソウダン(相談)」で説明することもできる。「議官」ヒヨキスルヤク」(八十五オ二行目)、「穿議」ヒヤウギスル

コト」(一二六オ三行目)は「ギ(議)」を「ヒヨウギ(評議)」で説明した例にあたる。さらには、「熟談」トクトソウダンスル」(一〇六オ六行目)「評決」ヒヤウギガキマル」(一二三オ八行目)「評定」ヒヤウギガサダマル」(一二三ウ二行目)という例もあり、一つの辞書体資料の内部を丁寧にとらえることによって、一字漢語・漢語語構成要素と漢語との結びつきがかなりな程度明らかになると考える。

「賊使」ゾクトノシ、ヤ」(四十五オ三行目)、「賊首」ゾクトノタイシヤウ」「賊勢」ゾクトノイキホヒ」「賊陣」ゾクトノデンヤ」「賊営」ゾクトノデンヤ」(四十六オ二行目)、「賊渠」ゾクトノタイシヤウ」「賊隊」ゾクトノヘイタイ」(四十六オ三行目)「草賊」ヨハキゾクト」(七十八ウ六行目)「勦賊」ゾクトヲウチツクス」(七十九オ六行目)「挙賊」ゾクトノコラス」(八十六オ八行目)「逆賊」ムホンノゾクト」(八十七ウ八行目)からは、「ゾク(賊)」と「ゾクト(賊徒)」とが結びついていることが窺われる。

「難期」ナンギノトキ」(四十八ウ五行目)「難塞」ナンギスルコト」(四十八ウ六行目)「後難」ノチノナンギ」(六十七ウ三行目)「詰難」ナンギニイヒカクル」(八十六ウ九行目)「死難」シヌホドノナンギスルコト」(九十五ウ六行目)「避難」ナンギヲヨケル」(一二二オ二行目)「蒙難」ナンギニデアフ」(一二四オ九行目)からは、「ナン(難)」が「ナンギ(難儀)」と結びついているさまが、「難論」ナンダイイヒカケル」「難問」ナンダイノトヒゴト」(四十八ウ六行目)からは、「ナン(難)」が「ナンダイ(難題)」と結びついているさまが窺われる。

「悔責」<sup>くわいせき</sup> コウクワイシテミラセメル」(五十三オ九行目)「悔心<sup>くわいしん</sup> コウクワイノコ、ロ」(五十三オ十行目)からは、「カイ(悔)」と「コウカイ(後悔)」とが「約諾<sup>やくだく</sup> ヤクソクシテウケヤフ」「約誓<sup>やくせき</sup> ヤクソクチカヒ」(五十四ウ四行目)「決約<sup>けつやく</sup> ヤクソクラムスブ」(五十八オ六行目)「明約<sup>めいやく</sup> チカヒヤクソクスル」(九十オ三行目)からは「ヤク(約)」と「ヤクソク(約束)」とが結びついていることがわかる。その他、「駭視<sup>げんし</sup> ギンミスル」(五十六ウ三行目)「駭問<sup>げんもん</sup> ギンミスル」(五十九オ五行目)「覈驗<sup>かくげん</sup> シカトギンミスル」(六十八オ九行目)、「檢使<sup>けんし</sup> ギンミノツカヒ」(五十六ウ五行目)「檢覈<sup>けんかく</sup> ギンミヲシヌク」(五十九ウ三行目)では、「ケン(驗)」「ケン(檢)」が「ギンミ(吟味)」と結びついていることがわかるし、「鴻恩<sup>こうおん</sup> オホヒナルランギ」(六十七ウ六行目)「洪恩<sup>こうおん</sup> オホヒナルランギ」(六十八オ一行目)では、「オン(恩)」と「オンギ(恩義)」とが結びついていることがわかる。「殊功<sup>しゆこう</sup> カクベツノテガラ」(二〇三ウ一行目)「殊遇<sup>しゆぐう</sup> カクベツノアシラヒ」(二〇三ウ二行目)「殊榮<sup>しゆえい</sup> カクベツノメンボク」「殊典<sup>しゆてん</sup> カクベツ」(二〇三ウ三行目)「殊特<sup>しゆとく</sup> カクベツ」(二〇三ウ四行目)「殊寵<sup>しゆちゆう</sup> カクヘツノチャウアイ」(二〇七ウ一行目)もある。

## おわりに

先に引いた拙書(二〇一二)においては、「和語と漢語とがある種の緊張関係を保ち、その緊張関係に基づいて語彙体系が形成されていたというのが過去の日本語であろう」(二八六頁)とも述べた。「あろう」と予想の表現で述べたことになるが、本稿で行っ

たことを、その「予想」を裏付ける作業の一つとして位置づけた。本稿では、もっぱら漢語を漢語で理解するということを注視し、それとともに、一字漢語、漢語語構成要素がどのように理解されていたかということを併せ考えた。しかし、その漢語は和語とともに、当該時期の語彙体系を形成しているのであって、和語との結びつきを何らかのかたちで有しているのとみるのが自然である。さらに観察を積み重ねて、考察に深みを持たせていきたい。

## 注(1)

その一方で、語釈を置く「格」の大きさが限られているために、語釈はぎりぎりまで圧縮せざるをえず、当該時期の漢語理解の「核」が示される場合も少なくない。したがって、漢語辞書の語釈は、当該時期の漢語理解を探る有効な手がかりになると考ええる。

## (2)

二〇一二年度の日本語学会秋季大会において、田辺和子・中條清美による「新聞コーパスにおける漢語動名詞の語彙文法論的考察」と題したブリス発表が行なわれた。当該発表は、「日英新聞記事対応付けデータ」の日本語部分を分析対象としたものである。現代日本語についての観察ということになる。例えばそこでは、「サイタク(採択)」が「動詞としてサ変活用によって使用されることが多い」(手稿集二二六頁)と指摘されている。「文明いろは字引」で「サイタク(採択)」にあたると、「採択<sup>さいたく</sup> トリエラブ」(七十八オ二行目)とあって、語釈にやはり動詞が置かれていて、注(1)で指摘したように、「格」の大きさが限られているので、複数の品詞で使われる漢語の場合、やはり使用頻度がたかい(と判断された)品詞の語釈が置かれるのが自然である。そうした目で、語釈を観察することも必要である。

## (3)

「ソントク(損得/損徳)」は古本「節用集」にも、「損免<sup>そんめん</sup>」「料失<sup>りょうしつ</sup>」「得<sup>とく</sup>」「否<sup>ひ</sup>」「破<sup>は</sup>」(「草間直方本」そ部言語進退門)のようにみえ、また『日葡辞書』においても「Soncou. Perda. Kpovento.

（損失と利益と）」と見出し項目となっており、室町期から使われていた漢語であったと思われるので、『言海』に載せられていてもおかしくはない。草間直方本が掲げている、六つの漢語の中「ソシリヨウ（損料）」「ソシシツ（損失）」の二つは『言海』に載せられている。

（4）小島憲之は『漢語逍遙』（一九九八年岩波書店刊）において、「語性」について「ここでいう「語性」とは語の性格の意。わたくしの用い始めた言葉と思うが、平成の雑誌論文ではかなり使用されている。」

る」（二二頁）と述べている。

（5）「見出し項目」「語釈」は「説明される語」「説明する語」という関係にあり、「見出し項目」として採りあげられている漢語と、その説明に使われる、「語釈」に置かれる漢語とは、いわば層が異なると考えられる。したがって、「語釈」に置かれた漢語が「見出し項目」となることは通常はないと予想されるが、『文明いろは字引』はそうではない。そうしたところからも『文明いろは字引』の見出し項目には「ばらつき」があることが窺われる。

## 新刊紹介

河野貴美子・Wiebke DENECKE 編

### 『日本における「文」と』

#### 「ブンガク (bungaku)」

欧米に傾倒したいびつな「ブンガク」偏重への疑念。そして、「文」という概念をキーワードに、日本、さらには東アジアの文化をとらえなおすこと。本書は、これらの明確な問題意識に貫かれている。

十四年以上の歴史をもつ、勉誠出版の

『アジア遊学』シリーズの一冊として刊行された本書は、古代から近現代までを射程にいれる十九の論考と序言からなり、「文」と言語―ふみとことば・「文と経国」・「文士・文人」・「文と作文」・「文からブンガク (bungaku) へ」という五項目の構成によって複眼的な考察をくわえる。

明治期に「literature」等の訳語としての「ブンガク」ということばが現れて以来、隠蔽されてしまった東アジア伝統の「文」

という概念。それを再び浮かびあがらせるため、専門の時代、領域、あるいは国籍など、あらゆる垣根をこえた研究者による「文」をめぐる最新の研究成果がここに結集した。

本論集が、研究の新たな地平をきりひらく大きな第一歩であるのはもちろんのこと、これからの研究を志す者すべてにとつての道しるべともなるにちがいない。

（二〇一三年三月 勉誠出版 A5判 二五五頁 税込二六二五円）〔吉野泰平〕